広がるつながり、知るたのしみ。

多摩らいふ倶楽部 会報誌

たまら・び 悠（ゆう）

2025 冬号

最終号 No. 23

水を辿る多摩地域

多摩知的探求

Deepen the knowledge of Tama

多摩をより深く知るための場所と人

PLACE

農的社会デザイン研究所／清水農園

武蔵野市にある清水農園。畑空間に集う人と野菜が共に育ち育て合う共同体“commune”（コミューン）を目指す。

お話を伺った農的社会デザイン研究所の蔦谷栄一さん（左）と清水農園の清水茂さん（右）。

ABOUT

人間の暮らしと自然との距離が開きすぎていることに危機感を持ち、より多くの人が農業に触れて少しでも自給自足していくことを啓発・応援していくための講演や講義、調査、情報発信を行う「農的社会デザイン研究所」。関東を中心にさまざまな農園と連携する中、農的社会デザイン研究所が思い描く社会を体現している農家のひとつが「清水農園」。参加者と畑空間を共有し、種まきから管理、収穫、販売まで行っている。

農業が瀕する危機を打開する 人間らしい暮らしを叶える「農的社会」

当たり前に口にしている米や野菜などの農作物。近年では温暖化の影響により予定通り収穫ができないことや担い手不足など、多くの問題が農家を苦しめている。そして現在の農家は高齢者が約70％（2019年時点）。しかし小規模農家に対しては国の支援も手薄で事業化が難しく農家を志す若者は少ないのが現状だ。国内農業の衰退、それはすなわち私たちが明日を生きる糧を失っていくことと限りなく等しい。社会における農家や農業の置かれた状況について警鐘を鳴らし、意識改革を起こすために活動するのが「農的社会デザイン研究所」の蔦谷栄一さんだ。

「人間らしい生活を追究した時に自然との距離が開きすぎていてはダメだと痛感しています。現代は産業主義に偏り自然を収奪している自覚もなく、皆が幸せに暮らし続けられる社会の本質を見失っています。自然と一体となり食べるものは少しでも自給をする。そのような〝農的社会〟が必要だと考えています」

蔦谷さん自身が二地域居住して畑を耕し農作物を育てる中で見つけた持続可能な社会の本質と、それを実際に体現している農家を紹介する。

農業・農地を軸に人が集まる清水農園というコミュニティ

近隣の幼稚園や団体、都心からも人が集まり、それぞれが育てたい作物を種まきから管理、収穫、販売までを一貫して体験することでコミュニティが育っている「清水農園」。農園主である清水茂さんに話を聞いた。

「以前は40種類くらいでしたが、娘や利用者の皆さんが参入したことで今では70種類近くの野菜が育っています。農作業や収穫を行うだけではなく、畑に参入することにより自分が何者かを発見し、感じ、育み、共有することで自然と人と自分と向き合い、問いを深め探求し、自然と共に生きる姿勢を身につけてほしいです」

清水さんの娘さんが参入するようになり育てはじめたバジル。

清水農園では成蹊学園や玉川上水の桜並木などの落ち葉を持ち帰り発酵させた堆肥、その他有機物を発酵させたボカシ肥を肥料にする有機農法を大切にしている。清水さん曰く有機農法は命で命を育てるということ。土に与えた有機物は土の中の微生物が食べる。有機物は死ぬ時に蓄えた養分を体外に放出して仲間や野菜に栄養を与える。それらを糧に育った野菜は地表では光合成をして養分をつくり、地中の根から微生物へと返す。さらに微生物はミネラルや抗生物質を野菜に還す。自然の摂理である共生の営みから人は多くを学べると清水さんは考えている。

有機栽培を行っているため虫も多く見られる。

「私は農業をはじめる前は子どもたちに絵を教えていました。野菜を育てる前に人を育てることが先にあるのです。清水農園に足を運んでくれる人たちには畑に関わることで学び共に育ってほしい。ここが〝共育〟の場であるように意識しています」

農業に関わり、生命原理である農に触れることで自然を搾取するだけではなく人間も自然の循環の一部であることを学び、そこに参入する。自分で命を育て命をいただく営みの意味を体感し、物質に偏重した考えを修正してほしいという願いを持って清水さんは農園を運営している。

元絵描きの清水さん。畑の休憩所にはイーゼルが。

小さな意識改革が起こることで変わる社会

改めて「農的社会」とは何か。それは大量消費・生産ではなく一人ひとりが自身で食べるものを自給し、その過程で人間は自然の循環の一部であることを理解し、自給したものを共有財産としてシェアすることで自然と人との共生を図っていく社会だ。これがこれからの日本に必要だと蔦谷さんは話す。

「今は情報を手に入れやすい時代なので、既に農業にまつわる社会問題解決に意欲的な人もいます。しかしその交流がオンラインだけのことも多い。その個人同士がオフラインでもつながり問題意識を共有して解決の行動へ移していく環境整備が必要です」

農的社会の実現はひとりの問題意識や力だけでは難しい。しかし思いのある個人同士がつながることで小さくても持続可能なコミュニティが出来上がり、やがて社会の仕組みをも変え得る可能性を秘めている。自分の手で自ら食べるものを育てる体験ができる農家は清水農園をはじめ多摩地域に点在している。そのような環境に出向いて土に触れ、作物の成長を見守り恵みをいただく喜びを味わう。できた作物を仲間や家族と分け合うことで自然に生かされながら共にあることを実感する。そんな幸せを感じる農的社会を体験を通して意識してみては。

ヘビウリという珍しい作物を紹介してくれる清水さん。

楽しそうに作物について話し合う蔦谷さんと清水さん。

農的社会デザイン研究所

090-1792-6830
CommunityAgriculture@nouteki-design.com
http://www.nouteki-design.com/

清水農園

武蔵野市境4-11／JR中央線武蔵境駅徒歩約20分

“農的社会”に参入してみよう

農業体験教室「農土香（のどか）」

蔦谷さんが管理する畑（山梨県）で行われる日帰りの農業体験教室「農土香」。子どもが田舎暮らしと畑に触れることを目的としているが、保護者として参加する大人にとっても発見や学びが多い。命を育む尊さを心で理解し人生の一部として農業に触れ続けてほしいという思いを持ち開催。

写真提供：蔦谷雄介さん

啓発プログラム「農あるまちづくり」講座

行動を変えるためには議論が必要だと考える蔦谷さんが定期的に行う、全10回の座学とディスカッション。参加者は実践者などから学んだことをアウトプットすることでより深く農ある生活の重要性を理解できる。また、参加者同士が仲間となり社会へ影響を与える存在になることも目的のひとつ。

詳細は農的社会デザイン研究所のホームページへ。